

2026年4月浦和学院が中高一貫校化

探究活動やIB型授業を軸に 個性を引き出し、 高校の多様なコースに繋ぐ

甲子園の常連校としても知られる埼玉県の浦和学院高校。そのすぐそばに2026年4月、浦和学院中学校が開校します。校長に就任する予定なのは、現在浦和学院高校に3人いる教頭の一人、林 洋平先生です。40代ながら浦和学院高校が力を入れてきた国際教育のほか、学校行事や部活動などで同校を牽引してきた林先生に、中学校開校に対する思いや教育内容について、リクルート まなびDivision部長の高嶋純子が伺いました。

林
洋
平

浦和学院中学校
校長(予定)

対
談

高
嶋
純
子

リクルート まなびDivision
教育支援統括部 支援推進1部 部長

Yohei Hayashi

Junko Takashima

Yohei Hayashi



Junko Takashima

教員も学習者の1人となり、 生徒と共に考える授業を

少人数を活かした 体験的かつ協働的な学びを

高嶋：2026年4月、浦和学院中学校が開校します。どのような学校にしていきたいか、浦和学院高校との接続も含めて教えてください。

林：浦和学院高校は、約3000人の生徒が集う埼玉県有数の大規模校です。国際類型、特進類型、進学類型という3つの類型に11コースを設け、多様な進路希望に応えるほか、運動部・文化部問わず部活動も活発で、国際教育にも力を入れています。

そうした多彩な表情をもつ高校に併設する形で2026年4月に開校するのが浦和学院中学校です。6年間を通じた進路指導、学習指導、生活指導が行える中高一貫校の強みを活かせるわけで、学院全体に新しい風が吹くはずです。初年度の募集定員は100人。少人数であることを活かした体験的かつ協働的な学びや探究活動に力を注ぎ、コミュニケーション力や共感性、批判的思考力などの非認知能力を育みたいと考えています。

高嶋：中学校においても、探究を核にする学校は増えていますが、浦和学院中学校における探究的な学びの特徴は何でしょうか？

林：中学校で行われる探究は、発表の場が校内に限定されがちですが、本校は校外の人に向けた発表や実践の機会を積極的につくりたい。社会に対しての価値づけを伴う“社会実装型”の探究にしたいと考えています。

高嶋：校外との協働といったとき、関係性の構築や実際の運営など、先生方の負担は大きいと思います。何かアテはあるのですか？

林：本校の運営元である学校法人明星学院は、浦和学院のほか、医療と福祉の2つの専門学校や幼稚園を有しています。また、母体となるグループは多くの医療法人や社会福祉



はやし・ようへい ● 東洋大学文学部卒業後、千葉県の公立高校に英語教諭として赴任。私立中高一貫校を経て2008年浦和学院高校に。執行部長などを経て2024年教頭。2026年4月開校の浦和学院中学校校長に就任予定。

Yohei Hayashi



Junko Takashima

法人、海外を含む複数の企業や団体で構成されています。提携している大学や姉妹校も多く、それら機関との連携が期待できます。

また、中学3年時に行うシンガポール研修プログラムでは、現地の企業や学校と交流するため、自分たちの探究の成果について、まったく違う視点からフィードバックもらえると考えています。そうやって中学校段階で、探究的に物事を捉える習慣がつくと、高校に上がり、学校行事や国際交流などで関わる人が増えるなか、より考えが深まることを期待しています。

日常の授業でも押さえない 探究的要素とIB型スタイル

高嶋：探究活動は、主にどのような時間に取り組みされるのでしょうか？

林：総合的な学習の時間やロングホームルームを中心に、日々の授業や学校行事を含め、3年間体系化したうえで高校に繋がります。教科の授業でも、教員が出題し、解説するというスタイルではなく、生徒同士で解法を話し合うなどグループワークを多用した学習環境を意識的につくりたいと思います。

その点、浦和学院高校における国際類型の国際バカロレア（以下IB）コースで進めてきたIB教育のノウハウを活かしたいと思います。私なりにIB型の授業は何かと言えば、答えがなく、指導者もいない、生徒が主体となる授業です。簡単には答えのない問いを立て、教員も学習者の1人として生徒とともに考え、

学び合う授業にしたいです。

高嶋：講義型の授業に慣れた先生にとっては、指導が難しいと思われますが、研修や育成をどうするのか興味がわきます。

林：そうですね。私自身、いくつかのIB科目の指導者資格を有しているためアドバイス可能ですが、高校のIBコースの担当教員とも密に連携をとる予定です。一番良いのは、IBの指導者資格をもつ教員の模擬授業を受け、その良さを体感してもらうこと。

探究もそうですが、すべての授業をIBスタイルにすることは困難であり、ピンポイントで取り入れるだけでも効果的です。私は今、大学院に通って探究の研究をしているんですが、教授の考え方も同じで、日常の授業においては、ここぞというときに取り入れるだけで十分。加えて、各科目ごとに1学期に1回くらい、探



たかしま・じゅんこ ● 2006年リクルートエージェントにキャリアアドバイザーとして入社。新規事業立ち上げのためリクルートメディカルキャリアへ出向し、2013年に同社の営業部長に就任。2018年に帰任後はリクルートキャリアの営業部長を務め、2023年より現部署の部長に就任。

Yohei Hayashi



Junko Takashima

究的な学びができれば、それでいいというスタンスです。学期に一度とはいえ、5、6時間はかける形になるのですが。

開校準備のかたわら、 自己研鑽のため大学院に通う日々

高嶋：開校準備でお忙しいなか、大学院にも通われているんですか？

林：はい。早稲田大学教職大学院の、高度教職実践専攻に籍を置いています。本校には教員の学びや挑戦を後押ししてくれる風土があり、中学校開校の責任者としてさらに研鑽を積む必要があると感じ、理事長に相談したところ、快く背中を押してくれました。ここで得た最新の知見を、新しい学校づくりに活かしていきたいです。

高嶋：そうなんですね。そもそも、林先生が浦和学院中学校の校長予定者になられるまでの経緯を教えてください。

林：学校法人のなかで中学校の開校計画が進み、高校との接続を考え、本学院を熟知した内部の人間が望ましいという判断から、校長職を校内で公募する話がもち上がりました。誰に背中を押されたのでもなく、自ら手を挙げました。前任校も含め、自分のこれまでの経験を活かしたいし、新しいチャレンジをしたいと考えたからです。

高嶋：想像していなかったことが日々起きているのではないのでしょうか？

林：その通りで、最初のうちは自分の理想の教育をイメージして、「あれやりたい、これやり

たい」と考えていましたが、募集や入試など、やるべきことが次々に押し寄せるため、多くの人々の協力を得ながら、一つずつ現実的な課題を解決しているところです。

「国際教養力」「人間力」「デジタルテクノロジー活用力」という3つの柱

高嶋：そうしたなかで作成された学校案内を拝読すると、新たな時代を切り拓くために必要な“未来力”として、「国際教養力」「人間力」「デジタルテクノロジー活用力」の3つを掲げています。それぞれのこだわりを教えてください。

林：「国際教養力」は、語学力やコミュニケーション力、幅広い知識をあわせもった、地球市民として基本となる力です。そのため、公立中学校の授業数を大きく上回る週5コマの英語の授業ほか、ネイティブ講師による「英会話」を週1コマ必修としています。また、英語に次いで話者が多い中国語講座も週1コマ用意。姉妹校である中国や台湾の生徒との交流も活発にしていきます。

英語の教員としては、中高の接続をかなり意識しています。中学校段階で4技能をバランスよく高め、英語に慣れ親しんでおくことが、高校に入り多読や入試対策をするようになって英語嫌いにならない秘訣だからです。せっかくの姉妹校との交流やオンライン英会話といった実践的な学習機会を活かすためにも、早い時期から英語の楽しさを知ってもらいたいし、英検を中心とした検定試験で成長を実感して

Yohei Hayashi



Junko Takashima

多様な要望を汲み取ったうえで、 高校とスムーズに接続するコース設計

もらいたい。そのため、高校の国際類型や特進類型の先生方と、学習進度やスコアを共有することを考えています。

高嶋：2つめの「人間力」は、広く解釈できる表現です。具体的に、どのような力をイメージしているのでしょうか？

林：受け身ではなく、自ら感じ、考え、行動できる人になってほしいというのが第一で、多彩な学校行事や体験学習、ボランティア活動のほか、外部スクールとも連携した地域クラブ活動も、その手段だと捉えています。当初はWHOが定義する「ライフスキル」(意志決定、問題解決、創造的・批判的思考など)を掲げていましたが、特定の能力に縛られず、より広く捉えられる「人間力」という言葉を選びました。

高嶋：ということは、3つめの「デジタルテクノロジー活用力」も、ブラッシュアップされた表現なののでしょうか？

林：はい。生成AIを含む最新のICTを念頭に、当初は「先進技術活用力」と掲げていました。ただ、教育内容を練っていくなかで、表現に違和感を抱くようになりました。というのも、「先進技術」と言っても、技術は常に進化しているわけで、中学校で扱ったときは先進でも、高校に入ったときは先進ではなくなっているか

もしれません。そう考えたとき、学んでほしいのは、技術そのものではなく、進化し続ける技術に対し、常に自分をアップデートしながら活用できる柔軟性です。そんなことを考えながら表現を変えました。

高嶋：確かに「先進」と強調してしまうと、「自分たちは、これを学んだから先進なんだ」と満足しかねませんからね。

先行き不透明なVUCAの時代と言われているものの、まだまだ正解にたどり着くことを第一の目的とした教育が中学校では一般的ななか、林先生からは、変化を前提とし、自分で感じ、考える力を重視する教育にシフトしようとするこだわりを感じます。何かきっかけがあったのでしょうか？

若者の自己肯定感を高くし チャレンジマインドを育てたい

林：はい。浦和学院高校の国際交流担当者として、生徒を海外に引率する際、現地の若者と接する機会が多くありました。すると、見知らぬ私に気後れすることなく、「将来、どんな仕事に就きたいか」とか、「そのために今、こういう活動を頑張っている」といったことを一生懸命伝えようとしてくれます。日本の生徒に

Yohei Hayashi



Junko Takashima

自己紹介をお願いしても、ひと言ふた言で終わってしまう状況とは対照的でした。日本人は控えめで、謙虚を美德とするなど、文化的な違いもあるのですが、総じて日本の若者より自己肯定感が高く、自分たちの未来に希望をもっているように感じました。

これは、私の個人的な印象だけではなく、各種調査にも現れています。例えば日本を含む6カ国の若者(17～19歳)各1000人を対象とした「国や社会に対する意識」調査(日本財団、2024年)では、自身の将来について「夢をもっている」と答えた日本の若者の割合は60%。自国の将来について「良くなる」と答えた割合は15%と、いずれも6カ国中、最低の数字です。

こうした事実に触れ、自戒を込めながら日本の学校教育を振り返ると、正解・不正解だけの評価や偏差値至上主義、同調圧力の強さや消極性といった課題が見えてきました。グローバル化の波のなか、さまざまな背景をもつ人たちと仕事や生活を共にするうえで弱みになりかねません。そうならないよう、少しでも早い段階から自己肯定感を高め、受け身ではなく自身で考え、挑戦するマインドを育てなければ、というのが今の私の原動力になっています。

高嶋：知識だけでなく、挑戦する意欲そのものが、これからの大学入試や社会で求められていますね。

林：はい、大学も、これまで得た知識・技能だけではなく、入学後何を学び、将来どうしたいかという意欲を見たいわけですね。総

合型選抜や学校推薦型選抜が増えてきたのもその現われです。今の社会が求めている能力を有し、かつ自己実現できる若者を、中学校のうちから育てたいと改めて思っています。

保護者や生徒の多様なニーズに応え高校に繋ぐコース設計

高嶋：その際、避けて通れないのが保護者の理解ですね。そうは言っても、有名大学に合格させたいというのが多くの親御さんの本音でしょうから。

林：そうですね。ただ、保護者の要望もさまざま「少しでも偏差値の高い大学へ」という希望もあれば、「国際経験を積ませたい」「部活動など、今しかできない経験をしてほしい」「手に職をつけさせたい」と話す方もいます。浦和学



Yohei Hayashi



Junko Takashima

院高校は、そうした多様なニーズに応えるため11ものコースを用意しています。中学校でも、そうした個々の要望を汲み取ったうえで、高校とスムーズに接続するコース設計をしているところですよ。

ただし、中学校の初期段階からコース分けするものではありません。というのも、小学校から中学校に上がる段階で、子どもの置かれる環境は激変します。心身の成長に加え、通学範囲は広がり、担任制から教科担任制へ変わるなど出会いも増えます。それに伴い、思い描いていたイメージと現実の間で、学校観も変わってくるでしょう。にもかかわらず、早いうちに「将来を見据え、コースを選択してください」とやってしまうと、時間の経過とともにミスマッチが生じかねません。

ですから、中1、中2ではコース分けをせず、全員が一緒に学びます。そのうえで三者面談を繰り返し、学習や生活状況を観察し、キャリア教育を通じた将来設計もしながら、ある程度の見通しがたった中3に進級するタイミングで初めて、「特進 α 」と「特進 β 」という2つのコースに分かれます。

特進 α は、高校における「国際類型」(高入生との混合)または「特進類型」(内部進学生 α クラス)への接続を念頭にしたコースで、あ

る程度の負荷をかけながら学習を進めます。

特進 β は、高校の「進学類型」(高入生との混合)または「特進類型」(内部新学生 β クラス、2年次より高入生と混合)の接続を念頭にしたコースで、先取り学習をしつつ、中学の学習内容を定着させることを重視します。

そのうえで、実際に高校に進学する段階で今一度、コース選択に対して熟慮する機会を設けています。

高嶋：成長や変化を念頭に、その都度、選択の機会をつくるわけですね。一部の進学至上の中高一貫校では、学力的についていけなくなると取り残されるケースもあると聞きますが、御校の場合、高校での受け皿が大きいので、保護者としても安心ですね。

林：浦和学院高校は、学力層が幅広く、生徒一人ひとりの強みも異なっています。学校として、個性を尊重する考えをもち、生徒それぞれが学校生活を充実させたうえで、最終的に自分の未来に希望をもって向かうことができる高校だと思っています。来春開校する中学校も、高校との密接な関係の下、生徒に合わせた柔軟な教育を進めていくつもりです。

高嶋：それができるのは、外部から招聘した校長ではなく、内部を深く知る林先生だからですね。本日はありがとうございました。



浦和学院中学校

2026年4月開校予定の中高一貫校。国際バカロレア型授業、個別最適化学習、外国語、ICT環境の整備などで、一人ひとりの学力向上を伸ばすほか、EQ(心の知能指数)を高めることを重視。SDGs探究プログラム「ラーニングジャーニー」、校内で調理する「自校式給食」、スケボー・ダンス・女子フラッグフットボールほか外部スクールと連携した新しいスタイルの部活動も展開。埼玉県さいたま市。